

利用者「うれしい」

平成筑豊鉄道が通常ダイヤでの運行を再開した27日、通学で利用していた学生や、貴重な交通手段として頼っていた高齢者などが

喜びの声が上がった。田川高2年の松本夏海さん(17)は、一部不通だった期間中、田川伊田駅で列車を降り、代行バスに乗り換

えて通学していた。「バスは列車より本数が少なく、早く帰りたいときは、バスを待たず歩いて駅を目指したこともある。乗り換えの必要がなくなったのはうれしい」

これまで運転免許を取得

したことがないという田川市の女性(73)は「列車が開してくれた」。行橋市の菊浪ミツ子さん(75)は「久しぶりに乗ったが、田園風景が美しい。観光客がたくさん来てくれるようになる」と語った。

(田中早紀)



「岳陽浪漫号」に乗り合わせて楽しむ田川高の卒業生たち

列車貸し切り応援

田川高卒業生 懐かしい風景 昔話に花

列車に乗って平成筑豊鉄道を応援。香春町の田川高を1966年に卒業した70〜71歳の元同級生33人が27日、この日113日ぶりに全線での運行を再開した平成筑豊鉄道の「へいちく浪漫号」を貸し切って車窓からの風景を楽しんだ。参加者の半数近くは、かつて列車で通学しており、懐かしい景色を眺めながら昔話に花を咲かせた。

列車の貸し切りは、同校であった同窓会総会の後に行われた。同窓会の名称にちなみ、貸し切り列車は「岳陽浪漫号」と名付けられた。発起人は、JR九州で佐賀鉄道部長を務めた加治屋清史さん(70)＝田川市出身。鉄道の仕事を離れてからも、沿線の人口減による減収などで、厳しい経営状況が続く地元の平成筑豊鉄道を気に掛けていた。力になりたい思いが強まり、今年1月、仲間に貸し切り列車

を提案したところ快諾されたという。準備を進めていた7月、西日本豪雨が発生。同校の最寄り勾金駅を含めた一部区間で不通が続いた。開催が危ぶまれたが、偶然にも運行再開と同窓会総会の日が重なった。「運命的なものを感じて喜ばしい」と加治屋さんは話す。

この日、列車は田川伊田駅を出発。後輩の卒業生らが造った日本酒「水平線」の突起で乾杯後、料理に舌鼓を打ちながら約3時間半の列車の旅を楽しんだ。神奈川県から4年ぶりに地元に帰ってきた植田一史さん(70)は「車窓からの風景は、あのころと変わらな

田川伊田駅で、運行を再開した行橋行き列車に乗り込む人たち



笑顔で話した。(田中早紀)